

ここまでわかった
鞠智城
第2号

建物遺構



鞠智城で見つかった建物遺構について、
最新の調査研究成果をお伝えします。



画：早川和子

鞠智城が存続した300年間には、様々な様式の建物が建てられた。その中でも、7世紀末～8世紀初めには八角形建物を含めた多くの建物が建ち並び、大勢の人が活動していたと思われる。イラストは、その時代の鞠智城の様子を再現したものである。

鞠智城の300年の歴史の中で、 様々な用途の建物が、様々な工法で建てられている。

古代には、竪穴式住居、掘立柱建物、礎石建物などの建物様式があります。鞠智城は300年にわたって存続していますが、その長い歴史の中では建物の変遷も認められます。鞠智城跡でこれまで検出された建物遺構は、総数72棟にも及びますが、これは300年間をとおして建てられた建物の数で、一時期に72棟の建物が建っていたということではありません。ただし、調査以前の畑地の耕作などで消失した建物遺構があったと思われること、現在確認している建物遺構の下層まで調査できていない箇所もあることから、本来ならば72棟以上の建物遺構が存在したことが推定されています。

現在、確認されている建物遺構の内訳は、八角形建物跡4棟(2棟×2時期)、掘立柱建物跡44棟、礎石建物跡21棟、礎石・掘立柱併用建物跡3棟を数えます。

鞠智城跡で最も特筆される建物跡は、八角形建物跡です。全国でも極めて珍しい建物跡で、国内の古代山城では鞠智城跡のみで検出されています。また、朝鮮半島では類

似した多角形建物跡が検出されていることから、朝鮮半島との関連性も考えられる遺構です。

掘立柱建物跡は、柱配置が判別できるもので、側柱建物26棟、総柱建物13棟を数え、側柱建物のうち2棟(24、27号建物跡)に一面だけ^{ひし}庇が付く建物が認められます。

礎石建物跡は、3間×9間の長倉形式の礎石建物跡(49号建物跡)をはじめ、すべてが総柱建物となっています。また、総柱の礎石建物の周囲を掘立柱とする礎石・掘立柱併用の建物跡が3棟存在します。

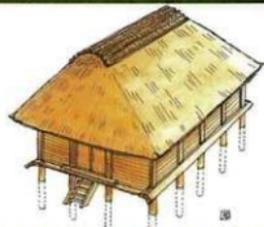
他の古代山城に例をみない鞠智城の特徴として、城域内に約12haもの面積を有する広大な平坦部を持つことが挙げられます。72棟分の建物遺構はその平坦部を中心に分布しています。このほか、外郭線上に城門等の施設は存在しますが、建物遺構はこの周辺に限られ、それ以外には想定できない状況にあります。鞠智城跡では、このように地形的な適地に建物が集中的に配置されているということが言えます。



掘立柱建物跡



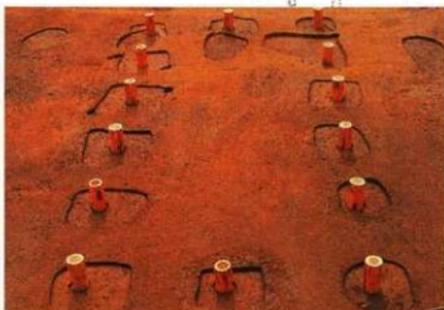
礎石建物跡



○ 掘立柱構造の建物遺構



60号建物跡



28号建物跡

掘立柱建物跡とは、柱穴を掘り、そこに柱を立てて建築する建物です。鞠智城跡では、建物の柱配置が判別できるもので、側柱建物26棟、総柱建物13棟を数えます。

まず、側柱建物は、建物の側面のみに柱を巡らすタイプの建物です。例えば、現在「兵舎」として復元している16号建物跡は3間×10間の側柱建物です。これは7.8m×26.5mと大型の建物跡で、17・18号建物跡もこれと同じ建物と考えられます。側柱建物は、平面の形状や柱の数で分類できます。

また、総柱建物とは、建物の側面だけでなく内側にも柱が設置される建物です。例えば、「板倉」として復元している5号建物跡は、3間×4間の建物跡で、6.9m×12.0mを測ります。総柱建物についても、平面の形状や柱の数から分類ができます。



兵舎



板倉



復元された建物と遺構明示

○ 礎石構造の建物遺構



56号建物跡



49号建物跡

礎石建物とは、柱の下に礎石を置いて建築する建物のことです。これにより、柱の根本の腐食を防ぎ、重量のある建物でも地盤沈下を防ぐなどの効果が得られます。礎石に使われている石は凝灰岩・花崗岩などで、鞠智城跡地内及びその周辺で採取できるものです。鞠智城跡の礎石建物跡はすべてが総柱建物で、平面プランから分類できます。

その中でも、49号建物跡は3間×9間の建物跡で、7.2m×21.6mと長大で、鞠智城跡の礎石建物では最大の規模を誇ります。

また、「米倉」として復元している20号建物跡は、3間×4間の建物跡で、7.2m×8.8mの規模です。このサイズの礎石建物は、鞠智城に多く存在します。

なお、11・12号建物跡は、5間×6間の礎石建物の周りを掘立柱で囲んだ礎石・掘立柱併用の建物跡です。



米倉



12号建物跡

軍事施設から行政施設へ。 建物の変遷から見る鞠智城

7世紀後半

鞠智城が創建された時には、掘立柱建物の倉庫や兵舎が建てられます。このような建物配置から武器や武具、食料を蓄えたり、兵士を常駐させて唐・新羅の侵襲に備えるなどの役割を持っていたのだと考えられます。



7世紀末～
8世紀初期

鞠智城が創建された時期の建物に加え、八角形建物や官庁的役割を持つと思われる大型掘立柱建物が新たに加わります。このことから、鞠智城の性格が築城当初の軍事目的から、行政的な役割を併せ持つように変化していると考えられます。



8世紀前半

この時期になると、それまでの掘立柱建物が礎石建物に建て替えられます。この段階になると鞠智城で初めて礎石建物が登場します。この時期は、まだ小型の礎石を使用しています。なお、この時期には前段階で建てられた八角形建物や掘立柱建物なども存続しています。



8世紀
後半以降

大型の礎石を用いた礎石建物が登場します。これらは米倉と考えられます。この段階になると八角形建物などはなくなっており、鞠智城には多くの米倉が建てていたようです。この時期には、鞠智城は食料の備蓄施設としての機能のみを有していたと考えられます。



鞠智城のシンボル 「八角形建物」を読み解く

日本の古代山城では鞠智城だけ

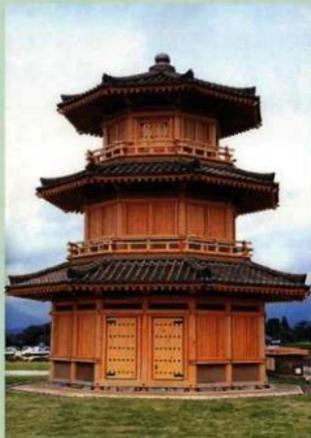
鞠智城跡で検出された4棟の八角形建物跡。この平面が八角形となる建物跡は、古代山城では鞠智城でしか検出されていません。また、国内で発掘調査によって確認された8世紀初頭までの八角形建物跡は、鞠智城跡の八角形建物のほか、前期難波宮跡の八角殿跡(大阪府)、標原廃寺跡の八角塔跡(京都府)、三軒屋遺跡の八角形建物跡(群馬県)の3つしかありません。このようなことから、鞠智城跡の八角形建物跡は極めて重要な遺構だといえます。

どんな役割だったのか？

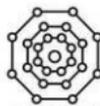
鞠智城跡の八角形建物跡は、中心に心柱があることから、塔のような高層の建物であったことが想定されます。また、柱の本数の多さから、内部には生活空間のようなスペースは存在しなかったと考えられます。さらに、南北2棟が一对となっていることから、鞠智城跡の八角形建物は実用的な建物というよりは、象徴的な建物であったといえるのではないのでしょうか。なお、現存する八角形建物跡は、仏教に関係する施設に多く見られます。ちなみに現在は、最上層に鼓を置き、城内に時を知らせたり、見張りの役目のある「鼓楼」として復元しています。

八角形が意味するものは？ 前期難波宮跡、群馬県三軒屋遺跡などの類似遺構

前期難波宮跡の八角形建物跡は、東西で2棟一对になっています。柱の配置跡は鞠智城跡のものに似ていますが、心柱が存在しないことから1層建てのお堂のような建物であったと考えられています。三軒屋遺跡の八角形建物跡は、柱の配置が他の八角形建物跡と異なり、総柱の建物となっています。『上野国交替実録帳』という文献の記載から、「八角甲倉跡」と呼ばれる倉庫であったことが想定されています。標原廃寺跡の八角形塔跡は、心柱がありますが、その柱の配置は他の八角形建物とは異なる配置となっています。



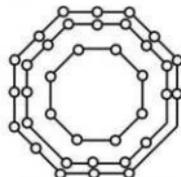
復元された八角形鼓楼



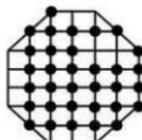
鞠智城跡南側八角形建物跡



標原廃寺跡八角塔



前期難波宮跡東八角殿院



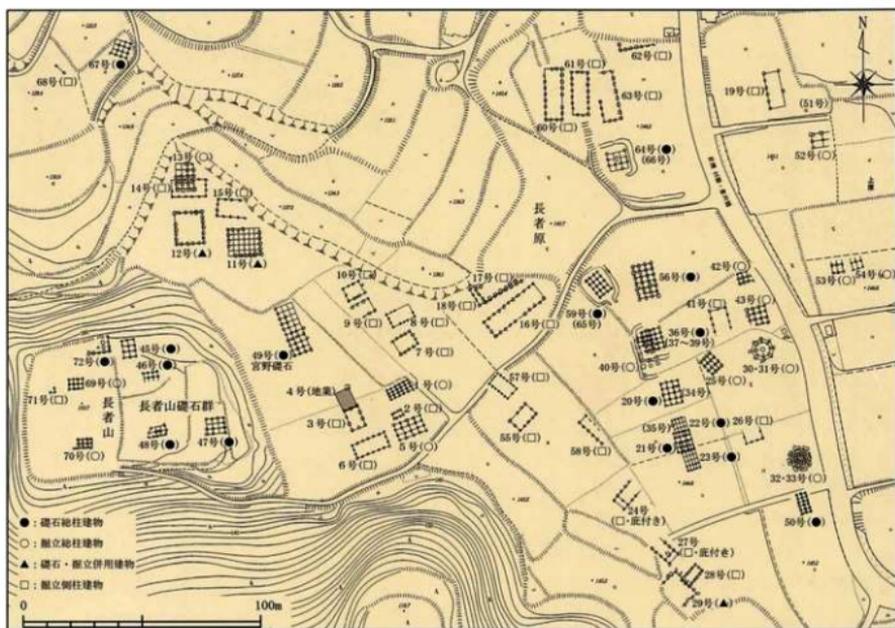
三軒屋遺跡八角甲倉

○：柱穴 ●：礎石

八角形建物跡柱配置の比較(S=1/800)

鞠智城跡の建物遺構の変遷

鞠智城跡において検出された72棟の建物遺構は、いくつかの視点からその変遷を追いかけることができます。まず、建物遺構の重なり合いを検討するという方法があります。建物遺構は何軒かの建物が重なった状態で検出されることがあります。これを発掘調査で検証すると、鞠智城跡では、掘立柱建物→小型の礎石を使用した建物→大型の礎石を使用した建物という変遷が認められました。また、建物の方向を検討することからも、その変遷をたどることができます。鞠智城の建物跡は、建物の方向がN20°~50°Wとそれに直交する建物群、建物の方向がN0°~12°Wとそれに直交する建物群の大きく2つに分けることができます。この場合、先後関係が問題になりますが、前者は掘立柱建物跡が多く重複関係がほとんど認められないのに対して、後者は遺構の重複が多く、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷が認められます。このことから、前者の建物群が先行するものと判断できます。



建物遺構配置図

以上の視点に出土遺物の年代を踏まえて検討した結果、鞠智城跡では、5期(第Ⅰ~Ⅴ期)に及ぶ時期区分と変遷が確認できました。第Ⅰ期は、鞠智城の創建期の建物で、掘立柱建物の倉庫群や兵舎が建ち並んでいた段階です。第Ⅱ期は、7世紀末~8世紀初頭を中心とする時期で、前段階の建物に加え、南北八角形建物や大型掘立柱建物が加わります。第Ⅲ期には、小型礎石建物が登場します。北側の八角形建物も掘立柱から礎石に変化します。第Ⅳ期は大型の礎石建物が登場し、倉庫群が立ちます。この時期には、礎石・掘立柱併用の建物も登場します。最後のⅤ期は、基本的にⅣ期と変わりません。この時期も大型の礎石建物の倉庫が建ち並んでいます。Ⅳ期の建物の上に再度建て替えられています。このような建物の変化は鞠智城の役割の変化にも関係していると思われます。

この電子書籍は、ここまでわかった鞠智城 2 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：ここまでわかった鞠智城 2 建物遺構

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2002 年 8 月 18 日